

漱石・『明暗』論考

——〈自由〉と〈孤愁〉の世界——

平 和 代

『明暗』の主題についての論究は、津田の「精神更生」と読む唐木順三氏と、津田夫婦の変遷と読む小宮豊隆氏を先行論とし、仮借と反仮借の論究が繰り返されて来たと思われる。これら先行論究は、作品中の人物を「誰」或は「誰と誰」と限定し、主人公への視点を当てて主題を読み取ろうとして来たものと思われる。然し、人物を主役と読む視点に定着する限り同じ枠内に留るはずである。これを突き抜けない限り、『明暗』の〈相対関係〉という人物構造への解釈には説得力に欠けると思われる。

従来の読みを突き抜け、新たな示唆を試みられたと思われるのは、管見の及んだ限りでは桶谷秀昭氏「自然と虚構——『明暗』(『無名鬼』第十二・十四号、昭四四・四五)のアプローチがありえると思われる。氏の主題そのものは私見との違いがあるが、それはこれから考察する過程で論及する事とし、ここでは従来の「一人物」Ⅱ「誰」と「二人物」Ⅱ「誰と誰」の枠組みを突き抜けた読みを示唆している点で、新たな読みと考えておきたい。氏によれば『我執』の人間関係を書いた作者の意図は「人生の原理を求める」事であると言われる。相対化された人物構造を関係の中で捉える方

法は新たな視点として解せるとしても、主題への論点は納得がいかない。

私には『明暗』を単に相対化された〈我執〉の追求とは論じ切れない。確かに、作中人物は〈我執〉に固着しており、越智治雄氏が言われるように自己の存在が「見えない人間」であろう。然し、この時点に留る限り、エゴイズムと見えない人間存在を相対化の中で捉えた作者の視点が何であったかと言う疑問は解決されない。佐古純一郎氏によれば漱石文学はエゴイズムから〈孤独〉を生ずるとの論究が成されている^(注5)。然し、この解釈は『明暗』の主題へのアプローチの糸口に成りはあるが、作品内の人間関係より生じた状況への解釈には説得力に欠けると思われる。ここで、エゴイズムと見えない人間達の関係より生じた状況への視点を追求する事が、主題論証の課題となりえることを記しておきたい。

一 喪失する 〈自由〉

『明暗』作中の女性達を「悪徳」呼ばわりしたのは江藤淳氏であった。周知のように氏の論点は、作者が布置した相対的人間関係

を、公式的に外側と内側とに分けた点であった。然し、第一にこの公式的解釈のし方には納得がいけない点があり更に、女性を「悪徳」^(注6)として、単一に規定し去る事は納得しかねる。第一の疑問は後に論及するとして、ここでは第二の疑問に視点を定める事とする。氏は次のように言われる。

①明治以来今日まで、日本の女性が漠然と感じつつけて来た個人主義的人間関係への憧憬の具象化であって②あらゆる「目覚めた」女性お延のような強烈な意志の所有者になるうとして来たといつても過言ではない。③つまりお延は新しい理想を持った新しい女なのである。^(注7) (番号は平)

と。右の文章の内、②から③への連結は納得される。詰り②「目覚めた」女性↓「強烈な意志の所有者」↓③「新しい理想」↓「新しい女」と。然し、それを①の「明治以来今日まで」↓「個人主義的人間関係」は解せるとしても、そこから「個人主義的人間関係」の具象化が②③のみに帰納しては、一つの不可思議は解けないと思われる。詰り、①より引き出せる設問は、第一に、個人と個人との戦いの関係が可能な意識の所有者↓女性、第二に、個人と個人との関係から想起される状況を所有せざる山ない人間↓女性から、第一が②③に連結されるとしても、第二への解決は成されないはずだ。この第二への視点の欠落が解決されない限り、江藤氏の「悪徳」の女性に留り②③の先に続くはずの「孤愁」の女を見る事は出来ないと思われる。^(注8)

これは、個人主義に内包されるエゴイステックな自分に気づかないでいる人間の行為から、何が生じたかの状況への視点が欠落している所から来ると思われる。そこで、女性、主にお延に視点を定め

この第二の「孤愁」の世界へ目を向ける事としたい。

お延の「孤愁」は、第八十一章から八十七章の小林との接触により深化すると読める。

作者はこの章立の始めに、小林に次のように言わす。

第一に、

「津田君は近頃大分大人しくなったようですね。全く奥さんの影響でしょう」(八十二)

第二に、

「奥さんは結婚前の津田君を御承知ないから、それで自分の津田君に及ぼした影響を自覚なさらないんでしょうが、――」

「わたしは結婚前から津田を知って居ります」

「然し其前は御存じないでしょう」

「当り前ですわ」

「所が僕は其前をちゃんと知っているんですよ」

話は斯んな具合にして、とうとう津田の過去に溯って行つた。(八十三、傍点平)

第三に、

「奥さんまだ色々残ってますよ。あなたの知りたい事がね」

(八十四)

以上、第一から第三のバラグラフはお延が小林との相剋で組上に嵌った部分を抜萃してみた。すると、ここでは二つの新たな事実を作者により知らされている事に気づく。第一の夫の「変化」、第二の「過去」、第三の「秘密」の内、既に第一は「同じ人変った」(七十九)事への認識は知らされている。詰り、第二、第三の「過去」・「秘密」を新たに知らされた事が知れる。更に、ここでお延

の心情へ視点を向けてみたい。それは、今迄知らなかったカテゴリーの不安と、知った後の不安に若し何らかの変化が生じているなら、小林とのこの状況にも何かが生じて来ていると思われるからである。すると、明らかにお延の心情は「不思議な男の前に入り乱れ（中略）雑然として彼女の胸に交錯した色々なものは決して一点に纏まる事が出来なかった」（八十六）と、動揺する心情を示している。ここから、小林とお延の關係から生じた状況が何であつたとの問いを設定しない限り、先の江藤説への疑惑は解決されないはずだ。もう少し作品に沿って読み込んでみる事とする。すると、次のようなパラグラフの拮抗にその糸口を見い出せると思われる。

もともと無能に生れ付いたのが悪いんだから、いくら輕蔑されたって仕方がありますまい。（中略）けれども世間からのべつにそう取り扱われて来た人間の心持を、あなたは御承知ですか（八十五）

と、

丸っこり同情の起り得ない相手の心持それが、自分、に、何、の、關係、がある、う、自分には又自分で考えなければならぬ問題があつた。彼女は小林のため想像の翼さえ伸ばして遣る氣にならなかつた。（八十五、傍点平）

お延は「入り乱れ」た心から自身の問題へ固執し、小林さえ「天がこんな人間になつて他を厭がらせて遣れ」（八十六）と、自分の存在の自負に沈下して行く。ここでの二者は自己の位置からしか他者を見ようとしていない。自己の苦しみは自己解決以外ない事を示唆されている。ここにエゴイステックな人間關係から「孤独」と、他者により充たされない心との彷彿語りへ「孤愁」の状況を生じた事に

成り得ると思われる。この場合、充たされない心とは、当然夫の「過去」及び「秘密」に束縛され「自由」の喪失へ近接した状態であるはずだ。

更に、第二百二十三章からの秀子の訪問する場面が、先のお延の疑惑実体への解明に構成された事は知れるとしても、私にとって不可思議に思えるのは、主にこの章を疑惑解明への章立として捉えるなら、次のようなパラグラフはここでの章立上何の意味を持ち得るかであつた。

「延子さんは随分勝手な方ね。御自分独り精一杯愛されなくっちゃ氣が済まないと思えるのね」

「無論よ。秀子さんは左右でなくとも構わないの」

「良人を御覧なさい」（中略）「だって自分より外の女は、有れども無きが如しつてような素直な夫が世の中にいる筈がないじゃありませんか」（百三十）

右の場面は、確實に津田への疑惑解明を離れ各自の愛情論に転化している。更に次のような場面に来ると、その転化が拡大されている。

「あるわよ、あなた。なけりやならない筈じゃありませんか、荷くも夫と名が付く以上」

「そう、何処にそんな好い人がいるの」

お秀はまた冷笑の眼をお延に向けた。（中略）

「それがあたしの理想なの。其所迄行かなくつちや承知が出来ないの」（百三十）

と。二つのパラグラフから知れる事は、「良人」「世の中」「理想」そして「愛」である。

各自の愛情論への転化が、作品の何に成り得るのか、との問題設定は、作者が何を言わんとしているのかの問題に帰納すると思われる。この部分の読みへの見解は、江藤淳氏が詳細に述べられておる。^(註10)氏が言われるように、女性達が背負っている「家」のメカニズムと「個人」の愛との関連は分かつても、それらを背負った人間達は自分が唱えた事を相手に分かってもらえただろうか。私にとって一番大切なのはこれえの視点である。何故なら、これが先の不可思議を解く糸口ははずだからである。

先に上げた二つのパラグラフ以後、お延は「あたしは何うしても絶体に愛されて見たいの。比較なんか始めから嫌いなんだから」(百三十)と、言い切つて堀の家を出る。ここから理解できる事は、第一に夫への疑惑解明が成されなかつた事、第二にお秀の愛情論で他者との差異を知る。すると、第一は充たされない心の継続への示唆と読めるが、この第二は何を意味するのか。認識の差は埋められていない事にここに、自己本位の愛それ故の「我」と、家のメカニズムに耐える愛それ故の「我」が連帯不可能な事と読める。そこから、二者を「孤独」に押しやり、更に充たされない心の継続と二重構造で捉えられる。「孤独」の状況を作者が設定した事を読み取れる。

更に作品に沿つてみよう。お秀により明瞭にされなかつた疑惑の実体を、「まだ信力は残っていた。」(百四十三)夫に希求する。諸家を取り上げるように、第百四十五章からの病院での津田夫婦のシーンには『明暗』の山場に違いない。「あなたに外されると、あたしはそれぎり倒れてしまわなければならない心細い女なんですから。」

(中略)一思いに安心させて頂戴。」(百四十九)と、お延は切迫

する。然し、津田は本^(註10)当の事を言わない。こういう場面でお延が「可憐」で人間的魅力を備えた人物である事が知らされる。更に、愛の不可能を証明している事も解せる。夫の「過去」と「秘密」に束縛され、他者に拘泥しているお延は、充たされようとして逆に「自由」を喪失し、お秀に対したと同様に夫にも切迫していった。ここでも、個人主義的人間関係から生じる「孤独」の状況を読み取れる。

二 「自由」の飛翔

では、津田は「自由」なのか。日常性の現実接点で関連を持つお延との間は、「自由」であつたと思われる。然し、津田が過去の女に再会し始めようと行動した時点から、「自由」は喪失へと接近し始めると思われる。^(註11)そこから、津田の人間関係は「孤独」をとまなう筈である。作品の实情に沿い論証したい。

津田が「過去の女」に再会した前後の場面に視点を置いてみよう。ここが、津田の「自由」の飛翔であり、喪失への近接を最も明確に構成されたと読めるからである。

旅館の迷路を彷徨う男は「夢中歩行者」のように「不安な渦」に刺激され「自分の霊幽」を見ている。漱石にとって、常にこの「迷路」^(註12)「幽霊」を彷徨うのは男であり、対象は「過去の女」「夢の女」であつた事は知れる。更に、振れ動く男の心は障子の音で「人間の存在に気が付いた。」(百七十六)

「是は女だ。然し下女ではない。ことによると…」

不意に斯う感付いた彼の前に、若しやと思つた本人が容赦なく現れた時、今しがた受けたより何十倍か強烈な警ろきに囚

われた津田の足は忽ち立ち竦んだ。眼は動かなかった。

同じ作用が、それ以上強烈に清子を其場に抑え付けたりしかつた。階上の板の間迄来て其所でびたりと留まった時の彼女は、津田にとって一種の絵であつた。(百七十六)

と。ここで津田は「片付かない」「物足りない」「自由」世界を逆流

させる方向に出会つた事に成る。詰り、「片付け」「充たされる」

「自由」の喪失への近接なはずである。ここから、二者の關係に生じた状況とは何であつたろう。「くるりと後を向いて」(百七十六)

室に戻り電鈴を鳴す清子の行為をどう解釈するかにより解決の糸口と成ろう。この場合、清子の行為には二つの解釈が成される。一つ

には昔の恋人に囚われている事、二つには津田を「絶縁」する事。

第一の枠内は、津田との恋愛關係を過去に持っていた女の当然の心情であらう。偶然の再会に対する驚ろきは、男を裏切つた女の意識と二律背反なはずだ。ここで問題なのは、この第一の視点が理解されるとしても、第二への移動が「絶縁」であつた事である。ここでは「囚われている」なら、㉔「絶縁」と㉕「接近」のどちらかに帰納されてもよいはずだ。詰り、第一から引き出される事がかならずしも㉔でなくてもよかつたはずだらう。然し、清子の行為は㉔

「絶縁」へ連結されている。いったいこれは何を意味するか。解決に先立ちもう少し作品に沿つてみたい部分がある。津田が清子に「囚われている」事は温泉行きで決定的に成っている。然し、その囚われ方は清子との意識の差に知れる。習日清子の室を訪問した津田は「凡てが改まっている」(百八十三) 女の行為から、過去の女の香りと現在の女の香りの距離を確実に知る。これは、第二の枠の㉔である事が知られよう。然し、津田にとっては清子を「相変らず

緩漫」(百八十三) に見えるからには曾てと今の距離を連結させる意識は残つており(この認識の基盤なくして、現在の女との距離を知る事へは帰納しない)。この津田の継続意識が、清子の「私の見た貴方はそういう方」(百八十六) という継続意識と同値なはずだ。詰り、他者を見る自己の継続意識の存在を認識される点にである。こういう意識の存在が、第一の枠を引き出した具體的裏付けに成り、津田も「囚われている」人間である事の確実性は解せる。然し、確実に違つていた事は、清子にとって「片付いて」いる「囚われ」方が津田にとって「片付かない」「囚われ」方であつた点である事は知られよう。そこから、津田を清子に「接近」させている。清子の行為が㉔「絶縁」に帰納した事に反し、津田の行為は㉕「接近」に歸している。ここで、二者の「囚われ」方の違いは知られるとしても、それが何故、清子にとって㉔「絶縁」であり、津田にとって㉕「接近」でなければならぬのか。

「津田にとっての「接近」は「片付けない」「充たされない」「自由」の喪失への近接であつた。その背後に、お延との不満な關係があつた事は知れる。

すると、清子の「絶縁」(津田が室を訪問した際の二者の会話からも、清子が津田の質問をはぐらかして逃げてしていると読める。)は津田との關係が「片付いて」おるだけでなく、過去の恋人に偶然再会しても、「接近」しなければならぬ程、清子の現在に不幸で物足りないものではないのではあるまいか。清子と関との結婚生活に論及したのは、管見によれば内田道雄氏(『明暗』『日本近代文学』第五集昭四十一・十一・一所収)によつて、既に成されておる。確かに、関が性病であつて流産回復の温泉治療の清子を、「性病」「流

産」の二重構造で捉え、関との結婚生活で、お延と津田と同じ「愛の戦争」をする人間ではないかと読むのは興味深い示唆である。^(注14) 然し、夫が性病でなくても、妻が流産しなくとも、夫婦は「愛の戦争」をするのではないか。津田夫婦が現にそうである。問題は、その「愛の戦争」で二者が幸福か物足りなさがあるかに過ぎないはずであり、それを計る物差は他者との出会いで確実に計れるのではないか。詰り、この場合「過去の女」と「過去の男」に成ってしまった他者にある。清子が津田を「絶縁」した意図とは、実はここに引っかかると思える。関との結婚生活で、清子とは津田に「接近」しなければならぬ程物足りなさがあった分けではない事である。

「絶縁」しても清子には帰るべき結婚生活の実存があった。

「貴方は何時頃迄お出です」

「予定なんか丸でないのよ。宅から電報が来れば、今日にでも帰らなくっちゃならないわ」

津田は驚ろいた。「そんなものが来るんですか」

「そりゃ何とも云えないわ」(百八十八、傍点平)

とは、帰る場所を持った女の言葉であらう。

津田が「自由」の喪失に接近する状況とは何であらう。「絶縁」と「接近」は共に自分の場所ではか他者を見られない連帯不可能なエゴイズムがある事、そして津田にとって充たされない心の存在を彷彿されている事「孤愁」の状況が生じている。津田由雄の関係の中にも、お延と同じ状況を読み取れるだろう。

この関係より生じる状況への視点を、小林と津田の間に見てみる事にしたい。

三 鋭利と陰影

従来『明暗』作中の小林の位置付けは、江藤淳氏により卓越なる論及が成されておる。これは、正宗正鳥氏の論証の系譜に立つ事は知られるとしても、小林の位置付けに對す解釈のし方には納得がいかない点がある。氏は次のように言われる。

外側から十把ひとからげに規定している時の漱石の眼は「社会」の中にある。そしてこの時、彼の視点は、ほとんど小林の視点と一致しているのだ。(中略)は、かりにかけてみれば、この男一人と、他の人物達とが丁度つり合うようなことになりかねないからである。^(注15)

と。小林が一人『明暗』に登場すと人物達と拮抗化されるとの指摘は、恐らく次のような文章の読みから一つは来ていると思われる。

第一に、

先生からそんな事を聞くと腹が立つ。先生にドストエフスキは解らない。いくら年齢を取ったって、先生は書物の上で年齢を取った丈だ。(三十五)

第二に、

いくら先生が貧乏したって、僕だけの経験は嘗ていないんだからね。(百五十八)

と。小林と言うインテリルンベンが同じジャンルに巣くう、藤井さえ軽蔑した点からであらう。このような場面から「この男一人」と他の人物との拮抗が引き出される裏付けとは成るとしても、江藤氏が論及された小林の世界―「社会」と女の世界―「自然」との規定への帰納は矛盾を生じる事に成る。氏によれば、小林の系譜を『二

百十日』(明三九・一〇)のおおきさんや『野分』(明四〇・一)の白井道也に求めているからには、反体制的人間の居場所を「社会」と定義したはずだ。すると、藤井も氏が使われた「社会」に内包されるべき人間に成り、小林一人で「社会」を負う事は納得がいかない。更に、小林と藤井を合じジャンルと見る視点には賛同出来るとしても、彼らの世界が他の世界を「外側から規定」するとの論点の不可思議さは解けない。

氏が「外側」と「内側」を、相対に見るか、一方が他方を内包する見方に立つか不確かであるが、どちらにしても外側が内側を「規定」するとの論及は、第一に外側が内側に比して重要である。第二に外側の重要な価値観が内側の世界に影響するとの論点に至ると思われる。然し、私には「外側」が「内側」を「規定」しているとは読めない。

論点を具体化させたく思う。氏の解釈からすれば、当然、作者は外側の世界に重点を置くから「ほとんど小林の視点と一致している」立場でなければ矛盾を生ずる。したがって、氏が作者と小林の視点が一致すると論及したのは当然でありえる。然し、問題はこの作者と小林の視点が一致するとの読みの違いにあると思われる。次のパラグラフを上げたい。

服装から見た彼等の相客中に、社会的地位のありそうなものは一人もなかった。(中略)

「何うだ平民的で可いじゃないか」

小林は津田の猫口へ酒を注ぎながら斯う云った。其言葉を持ち消すような新調したての派出な彼の背広が、すぐ殊更らしく津田の眼に映ったが、彼自身は丸で其所に気が付いていないら

しかった。(三十四、傍点平)
あるいは、

「まあ一杯飲みたまえ」

若者にはにやにやと笑った。不幸にして彼と小林との間には一間程の距離があった。立って杯を受ける程の必要を感じなかった彼は、微笑する文で動かなかった。しかしそれでも小林には満足らしかった。(三十四、傍点平)

右のように書く作者の視点は、決して小林の視点と同一とは読めない。作者は外側から「規定」などしていない。

小林と藤井の反体制側と他の体制側との位相は、相対と見なされる部分がある。然し、相対の価値付けはされていないはずである。

問題は、作者が〈相対関係〉に配置した中に何を課題と設定したかへの視点が重要であろう。この設問は関係の状況への視点と同値に成ろう。そこで、これより状況への視点を追ってみる事としたい。

彼は小林を泣かせるものが酒であるか、叔父であるかを疑った。ドストエフスキであるか、日本の下層社会であるかを疑った。其何方にした所で、自分とあまり交渉のない事も能く心得ていた。彼は詰らなかった。(三十六)

と。小林の涙をここで見られる限り、津田側から描いている。小林の〈孤独〉とは、このような所で救われない、充たされない状況の奈落に化してしまう事であろう。

然し、作者は小林と津田の〈相対関係〉を常に一方の視点でのみ書いているのではない事を上げておきたい。次のパラグラフにその実証性の一つが得られよう。

「落付けないのは君ばかりじゃない。僕だってちっとも落付

いていられやしない」

勿体ない事をいうな。君の落ち付けないのは贅沢だからさ。

僕のは死迄麵麴を追懸けて歩かなければならないんだから苦しいんだ」

「然し落ち付けないのは、現代人の一般の特色だからね。苦しいのは君ばかりじゃ、ないよ」

小林は津田の言葉から何等の慰藉を受ける気色もなかった。

(三十六、傍点平)

小林と津田の彼我關係は、小林を措定し津田側より扱われている。確かに、先のバラグラフと同様津田により仮借なく扱われている小林を知られよう。然し、ここに生じた状況への視点を欠落させると、小林だけを単に「孤独」な人間としてしか捉えられないはずだ。ここで、小林が「孤独」である事は解せるが、津田も同じく「孤独」であつたはずだ。互いに充たされない心情の彷彿を読み取るのはおかしくあるまい。詰り、小林が自己の「存在」の不安定性を寂寞の思いで訴え続ける時、それは他者に「迷惑」でもそうせず居られない自己本位に過ぎないと思われるし、津田も自分にとっての他者を「迷惑」に思い過ごしている。自己本位な人間に過ぎないと思われる。

津田が小林と同じく「現代人」の苦しさ更に淋しさに耐えるなら、他者を許容出来るか。津田とは「淋しい」と言う小林に「返事をしなかった。」(三十七)という沈黙によって他者を排斥している。これは、小林と同じに耐えていたはずである事が、「苦しいのは君ばかりじゃない」(三十六)との述懐に知れる。ここで二者は「孤独」で、充たされないでいた。漱石はこのような關係の中に確

実に生きている。この二者に見られる關係は、『こころ』(大三・四・二〇一八・一一)に於ける「私」と「先生」の延長線にあると思われる。

過去を引きづつて生きる「先生」と、未来に希望を模索する青年

「私」との關係は、エゴイステックな人間ドラマであつたはずだ。

次のような言葉の使い方に、その実証が得られよう。

先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取って、全く無用であつた。(傍点平)

一歩進めていうと、あなたの地位、あなたの麴口の資、そんなものは私にとって丸で無意味なのでした。(傍点平)

「先生」と「私」が使つた、この強烈な言葉に、漱石が個人主義人間關係を強調したかつたであろうと考えるのは愚かな事であろうか。私達はこういう場面の、こういう言葉使いにこそ漱石のニヒリズムと「孤独」を読み続けて来たはずだ。終始、「先生」と「私」により、投げかけられていた人間への興味は、一歩許容不可能な自己本位に「孤独」があつた。これは、津田と小林が個人主義よりニヒリズムを彷彿させた關係でも、互いの結び合いを断ち切つていない事と似つかわしいはずだ。

然し、小林と津田の彼我關係より生じた状況は單に「孤独」であるのではなく、そこには、他者により充たされない心の空白感をも内包させているはずだ。それは詰り、「孤独」の状況なはずであろう。作者は、主に小林を他者の目を通して描く時、小林が他者を批判すると同程度に苛酷な描き方をしている。

ここで、小林とは津田由雄や延子と同じに、個人主義的人間關係

より生じる状況——「孤愁」に身を置く人間であるはずだ。

*

一人の作家が小説方法に「去私」を打ち立てたとしても、^(注17)その作家の虚構には限界があろう。確かに、『明暗』は「百鬼夜行の図」^(注18)の世界であると言える——漱石の虚構の極地との指摘も許されよう。然し、漱石は「生」から「死」と確実に歩む私達と同じ人間であった。だからこそ、虚構と「去私」を構築し続ける姿にも、矢張り私には『道草』（大四・六・三〇・九・一四）の建三が嘗て来た、人間の嫌らしさ、図々しさ、自己本位それ故の状況の彷彿——「孤愁」を知る漱石の嘆きを見ずにいられない。

(注)

- 1 『『明暗』論』（『唐木順三全集』第十一巻所収昭四三）。「津田の精神更生」との見解には納得しかねる。第一に延子に対し費やされた筆の時間と枚数への疑問は解けない。第二に「病氣回復」と「精神更生」を二重構造で読む事は説得力に欠ける。肉体上に「更生」を読み取る事は違論がないが、「精神」への論究は解せない。これは、津田の病氣中と病氣後の意識の継続と関連されると思われるが、ここでは唐木氏の立場で読めない事を提示し詳細は後の機会としたい。
- 2 『『明暗』解説』（『漱石全集』第七巻昭四一）。津田夫婦が「夫婦らしい夫婦として、朗らかな安らぎに充ちた生活を送る事が出来る筈であつたかを、相当はつきり指摘して」と述べられるが、作品内からはむしろ、夫婦の接近が成されても、
 - 3 唐木論に反仮借を試み、小宮論の枠内で、論究したのに平野謙氏『明暗』（『夏目漱石』昭三三・六所収）がおる。小宮論の系譜に立つ論及で私はこの立場には立てない。氏の言われるように、夫婦の変貌、推移と読むなら小林の位置付けをどうするか、この視点に説得力が欠けると思われる。
 - 4 『漱石私論』（昭四六・六・三〇、角川書店刊）所収の『明暗のかなた』に作中人物を「見えない人間」として捉えている。
 - 5 『近代日本文学の倫理的探求』（昭四一・十・七、審美社刊）所収の『漱石の文学における人間の運命』
 - 6 本論の第三章にてこれへの論及をしている。
 - 7 『夏目漱石』（昭四六・四・十、勁草書房刊）所収の『明暗』但し百八十五頁。
 - 8 確かに女性が男性に対して「悪徳」と読める部分はある。所が、男性と相対化された関係の中からしか引き出されない故、男性の方にも「悪徳」を読める。相対化を拡大し、どちらが「悪徳」かの判断に迄引き延ばす事は不可能である。へ相対関係の構造を作者が設定したとの立場には居るが、価値判断をしているとの論点には納得いかない。
 - 9 注7に同じ、但し百八十三頁。
 - 10 漱石が第百三十章を九月二十四日に書き上げた事実を、山本松之助氏宛の書簡に知る。この事から推して、第百四十九章頃は恐らく十月十日〜二十日頃で、詰り十月中旬に書かれたと思

『明暗』は、八月十四日の書簡によれば十月頃完了とあった。とすれば、この第百四十九章を一つの山場として収縮した後小説を完了させれば、この期日の点では予定通りであったはずだ。所が、津田の告白が設定されず小説が続行されたのは、明らかに清子との再会が当初より漱石にはあった事と成ろう。然し、それなら清子出現に多大の枚数と時間の経過とは何を意味するかが問題であろう。これは、諸家の言われるように、延子を描く事に筆の喜びを感じたと思われる。又、男性と相対化される女性を描くにはそれだけの枚数が必要と解釈したい。これへの具体的論究は後の機会を得たいが、ここでは第四十五章から九十章迄、約四五回分語り日数にして一ヶ月半の間全く津田を登場させず、女性延子を書いてゐる事を示しておく。

11 『明暗』作中の〈自由〉はこの場合言葉そのものの「心のまま」「おもしろいまま」と捉えると共に、津田の思念「片付かない」「物足りない」心情を内包させているとして捉えたい。従って、津田由雄であり延子であり、自己の中に発芽した、或は継続されている「片付かない」「物足りない」心情を「おもしろいまま」に解決の方向に向う事、語り「片付け」「充たされる」方向へ向う事とは〈自由〉の喪失へと接近する。ここでは、このような解釈で〈自由〉を捉えたい。

12 越智治雄氏「漱石と夢の極点」(『国文学』昭四九・十一掲載)に「夢の女」が常に男を誘ひ、男の心の空白感、空洞感を照らす鏡と成るとの論及がある。津田にとって清子とは「夢の女」であった事は、温泉行きを決定させ実際に再会する行為よ

り解せる。

13 清子が「後を向いて」動く迄「一種の絵」であった。この構図は、明らかに『草枕』(明三九・九)の那美さん、『三四郎』(明四一・九・十二)の美禰子の延長である事は知れる。漱石は、常に「夢の女」を絵画のモデルとして捉えている。絵画の中の女「停止する女」への視点は何か。漱石の絵画観は「自由、安穩、平和を求める。―絵書は一番それに近い。」(大五)とある。これを直結させる事は危険であろうが、アプローチの側面に成り得る事と思える。「夢の女」である以上心に残った女は男にとって「停止する女」でなければならなかったはずだ。語り、心の空白感を救えなくても照らす鏡とは、停止された存在でなくてはならなかったと思える。そこに、「安穩」を見出す漱石の絵画観と重なると思える。

14 この視点より清子をお延と同じ女の女と捉えるのは危険であろう。寧ろ清子が津田の前でもズケズケという女である。との視点からお延との接点を見た方が説得力がある。然し、それを小坂晋氏「漱石の愛と文学」(昭四九・三)の見解「現実の泥をかぶった女性でも聖女となる」のかもしれないが、清子が「聖女」に成らなければならぬ根拠が示されない限り、納得しかねるし、又私には「聖女」とも「個我的女」とも単一にどちらか一方に帰納したくない見解にある。

15 『夏目漱石』(『正宗白鳥全集』昭四〇・八・二五、新潮社刊第六巻所収)に小林の位置を「油と水」と見ている。

16 注6に同じ、但し百九十三頁。

17 「則天去私」の解釈を、現在では、小説方法上に取ったとの

見解に立つ。

18 注2に同じ。

(後記)

本論文は昭和四十八年度卒業論文として提出した『近代の漱石』——『明暗』に於ける〈自由〉と〈孤愁〉の世界——のうちの「第Ⅱ部『明暗』試論〈自由〉と〈孤愁〉の世界」(全四章)を、削除訂正発展させたものである。この前に「第Ⅰ部近代の漱石」(全二章)として、明治社会の近代性を〈自由〉・〈個人主義〉に視点を定め論及しており、第Ⅱ部への架橋と成っている事を記しておく。